

解説 推進工事技士

推進工事技士の資格取得と今後の展望について

たじり ひでき
田尻 英樹

りんかい日産建設(株)
東京土木支店土木部
君津作業所所長



1 はじめに

入社して早18年が経過した。入社以来、私の工事経歴の中で下水道・水道工事が多い。とりわけ推進工事に携わることが多く、今まで泥水式・泥濃式・泥土式・鋼管さや管推進工事を経験してきた。

そうした中、推進工事の入札参加要

件で推進工事技士の配置を義務付ける自治体が増えてきた。また、総合評価落札方式においても推進工事技士の配置により加点対象とする自治体も増えてきた。このような社会的な要請もあったが、最終的には自分自身の技術力向上のために推進工事技士の取得を目指すことにした。

2 合格への道のり

受験するにあたり、まずは推進工法体系3冊の参考書を購入し、(公社)日本推進技術協会主催の講座講習会(全国5会場、5月に開催)を受講した。また、過去5年間分の試験問題と模範解答・解説集を購入した。まずは学科試験突破を目標に、この過去5年間分の試験問題と模範解答・解説集を繰り返し行うとともに不明点などは推進工法体系で確認した。また講座講習会で講師が示した重要ポイントをただひたすら覚え無事に学科試験は合格した。次の実地試験は、学科試験の四肢択一問題とは異なり記述式および計算問題となるため、用語の漢字などを間違えなく記述できるよう再び過去5年間分の試験問題と模範解答・解説集を繰り返し行った。計算問題は計算方法を把握すれば、特に難しい計算があるわけではないので、計算方法のパターンを覚えた。これから受験される方へのアドバイスとして何かないか考えたものの、私はひたすら上記方法により覚えたので、いいアドバイスとは言えないかもしれないが参考にしていただければ幸いである。



写真-1 現場での安全教育訓練状況

3 受験勉強で得た知識は取得後に活かされる

現在は下水道管きょ新設工事を行っている。今回は推進工事技士取得後初めての推進工事の現場で、初めての小口径管推進工事に携わっている。この工事の入札は総合評価落札方式のため、推進工事技士の配置を挙げており、受注においても推進工事技士の資格が加点対象になったと思われる。現在行っている工事は、呼び径450の小口径泥水式推進工法で4スパンあり、総延長は約800m、最小曲線は $R=60\text{m}$ である。これまでは大中口径管推進の現場しか経験したことがなかった。今回が初めての小口径管推進工事である。土木工学は経験工学とも言われているが、施工計画の段階で未経験の私ではわからないことが多かったが、推進工事技士取得のために購入した推進工法体系が大いに役立った。

4 まとめ

推進工事技士以外の資格としては、1級土木施工管理技士はもちろんのこと、1級造園施工管理技士、測量士、VEリーダーなど取得したが、自分自身として1級土木施工管理技士、推進工事技士以外はあまり活用されていないのが実情である。

推進工事技士という資格は、受験すれば誰でも取得できるような資格ではない。毎年合格率が40%以下というこ



写真-2 現在の現場での発進立坑内作業状況

とが、取得が難しい資格であることを示している。さらに受験資格では、学歴は「不問」とあるが「施工会社において推進工事に従事し、1年以上の指導監督的実務経験を有すること。または、施工会社、設計会社、発注官庁等において推進工事の計画、設計あるいは工事監理等に従事し1年以上の指導監督的実務経験があること」とあり、しっかりと知識と経験をもとにした技術力が求められている資格であるといえる。推進工事はシールド工事などと比較すると工事規模が小さく、簡単な工事と思われがちだがそうではない。ほかの土木工事と比較しても、目視確認でき

ない地中を各種計器や排土状況などで判断しながら掘り進む難易度の高い工種であることは間違いなし、一度発進してしまえば到達するまで常に管列全体が移動しているので、セグメントを組み上げて裏込めをするシールド工事と比較しても管理項目が少ないとは言えないのである。

このようなことから、推進工事技士資格制度は、推進工事に携わる技術者には必要不可欠な資格であると思う。今後、地方自治体等発注者側においては、入札条件として推進工事には推進工事技士の配置を徹底させるような展開を期待したいものである。

